

『新しい学校』一九五五年十二月（興文館）

## 政治教育の問題

矢口 新

### (一)

政治教育で一番問題になる所は、政治現象の取扱い方であるようである。

先日、東京の学校の先生方と会合した際に、砂川の基地問題についての取扱い方をどうするか、これは大変こまる問題だという話が出た。別に教科の内容としてあるわけではないから、取扱わなくてはならぬことはない。併し小学校の高学年や、中学生ともなると、何かの拍子に、そんな問題が出る。そういう時に教師としてはどういう取扱いをすればよいのか。

砂川問題は言うまでもなく、政治的な現象として取扱われている。これを学校で取扱う場合に、学校はもちろん、教育の場所であるからそれについて、直接生徒に行動をとらせるようなことはしない。また生徒にそういうことについて、どちらかに態度をきめさせる必要はない。あくまで政治現象について、理解を与えればよいと考えられる。しかし問題はそう簡単に片づけられないことが多いようである。例えば、生徒は具体的に行動はしなくとも生徒がそういうことを教師に質問するときは、自分がどういう態度かにきめたい、是非善悪をはっきりさせたいと要求している時なのである。つまり生徒は教師に、最

後の決を求めることが多いのである。これは政府がわるいだとか、これは村がいけないのだとか、はっきりさせたいのである。或はまた、生徒自身が、自分自身の判断をもっていて、それでよいかを確かめようとするのである。

この時に教師の態度が問題になるのである。一応政治現象として、これを正しく理解させることに力をそそぐべきだということは、教師もよく知っているようである。所がこれがなかなかむずかしいのである。事実それについて絶対に正しいという認識や理解は殆んど不可能であろう。だから結論的に言えば、正しい理解をさせるということは、わからないというに等しいことになる。これが教師にとってやりきれないことらしいのである。

まず第一に教師は、一個の社会人として、砂川問題についての考え方ももっている。そしてそのことが教育の場合に、とくに生徒に是非の判断を求められたような場合に、様々な陰影をもってあらわれて来るのである。教育の問題であるから、そういう意見を出すべきではないと一言に言えない所があるのである。

砂川の問題については様々な考え方があって、その考え方のどれか一つを主張する人はそれぞれ己れの主張の正しさを固持して、譲らないであろう。人は誰もその主張に忠実であるから。そしてそれは決して悪いことではない。その点では、教師も同様であって、端的に言えば、政府の態度について反対を表現する人もあろうし、村の態度について反対を表現する人もあろう。そしてそれはどこまでも固持したい気持をもつであろう。それはたとえ教師であっても、許されてよいことだし、事実法的にも許されているのである。

所が、これらの意見の持主は、真に問題を科学的に認識し、理解しているか。本当の所かくかくの事実であり、かく理解すべきであり、かく考えるのが正しいと言えるかどうか、こういう所まで考えて来る

と、真に考える人ならば、それは自信がない。ただ自己の知る限りでは、自分はこう思うだけだと答えるであろう。そして、いろいろと分らない所がまだ多くあるということを確認するであろう。即ち真に見る立場、研究する立場に立てば、結局は、この砂川問題も、よく分らない所が多くあると言わなくてはならぬことになる。事実専門的に研究している人にも相反する考え方があり得るのであるから、くつがえしていえば、真に見る立場に立てば、よく分らないという結論になるであろう。

ここまで来るならば、教師が生徒に、見る立場に立つて、分らないということをしみじみと分らせることが、この砂川問題という政治現象について理解を与えることになるのだということが分ると思う。それでよいのである。軽々にこれに対して判断して、それを絶対視するような態度をうえつけることは正しい教育とは言えないであろう。そういうことはよい教育といえないのである。

しかしこれは理解を与えるという教育について述べたのである。それでは実践との関係はどうなるのか。

成程実践の立場に立てば、それでは困るのである。われわれはいつまでも見てばかりいて分らないという態度であつては、実践にうつることが出来ない。われわれは、あれかこれかきめて、実践しなくてはならぬ場合が多いのである。分らなくともきめなくてはならぬことが多いのである。そこに実践と研究の関係がある。

実践というものをわれわれは、そういうように性格づけておくことが大切なことなのである。つまり何時の場合も、実践は、出来るだけ正しい実践であることを願っているが、同時に、限界があつて絶対的に正しい実践だということとは出来ないということを確認なくてはならぬのである。

だから政治の実践において、われわれが或る立場をとり、例えば投

票をするという如き場合でも、己れの意見の絶対性を主張して投票するのでない。またそうであつてはならない。つまり暫定的なのである。しかしそれは己れの実践に自信がないということではない。凡そ自信といつても、絶対的な正しさを主張するような自信は、狂人の自信である。自信をもつと同時に、他人もまた自信をもって主張していることを認めるといふ如き主張でなくてはならぬ。そういう実践でなくてはならぬ。そこに他人の意見を聞き、また多数の意見に従うという立場に立つことも出来るのである。多数決によつて大勢の赴く所に従うということもまたこうして考えられるのである。

このような認識と理解と、実践の態度とを地盤にして、教育が行われ、生徒が、正しい認識のむずかしさを体得しつつ、生徒自身が判断をしてもよいか、それは相対的であることを認め、万一どちらかに態度をきめなければならぬとすれば、あくまで、謙虚な態度でその主張をするという如き態度を身につけさせることが必要であろう。そのような態度で生活する人が真に民主的な人であり、社会の発展に貢献する人であることも体得させるのが教育であろう。

さて教師が砂川問題について、生徒児童から意見を求められたとき、或は生徒の意見が述べられて、その判断を求められたとき、とかく、迷うのは、結論として分らないということを言うに、ちゅうちよするのほこういう本格的な考え方がないからであろう。ただ結論として、分らないというのは、何か迷口上のように考えられる。そこでちゅうちよする。それはやはりいけないことである。しかし本格的に、追究したといつても、生徒の能力によつて具体的には、いろいろな段階があるけれども、——その上で結局わからない、ということに到達するのは少しも迷口上ではないのである。実際東京の先生方は、無意識的に、逃げるというような言葉を使って居られたが一面においては、それは逃げていたのであるが、また或る一面では、正しい態度であつ

たといえよう。しかし、もっと本格的に追究してそれが真に見る立場に立って、むずかしいものだという理解に到達すべきではなかったかと思われる。そうして、こういう態度が最も進歩的な態度であることを先生方は理解すべきである。教育における進歩的とは、真に人間を育てることにおいて、進歩的なことなのである。所が往々にして、いわゆる左翼的言辭を弄し、それをよく吟味することなく、生徒に注入し、押しつけるのが進歩主義であるかの如き錯覚が横行する。これは、教育においては、最も古い教育方式であることを自覚しなければならぬ。

かくして、政治現象の取扱い方について、最も基本的なことは、生徒を如何に、正しい真実の追究者たらしめるかということになるのである。この点では、政治現象に対して、社会科学的な正しい態度をとらせるということになる。政治教育とは、一つにはそういう基本的な社会の理解の問題であって、あくまで人間教育問題なのである。それは従ってそうむずかしいことでもないと言いうるし、また一方では、それなるが故に最も人間の真実を追究するという点で、教師に絶大な責任が課せられているとも言いうるのである。

## (II)

政治という実践は、或る意味からいえば、集団的思考による、試行錯誤のプロセスであり、それを通して、次第に正しい社会生活の実現を目ざしてゆく過程である。

国民大衆が思考し、それを行って来て、誤りを発見し、次により正しいものをまた考え、更に行う。こうして、ジグザクコースをたどりつつ次第に理想へ近づこうとするのである。従って、それは或る意味から言えば、誤りの連続である。しかし一方から見れば、正しいものの連続でもある。実は両者の総合である。

政治現象の認識理解には、常にこの錯誤と修正の二つのものが出て来なくてはならぬのである。それは現在行われている政治そのものについても言いうることである。ここに、また教師にとつてはむずかしい問題が起るのである。現実の具体的な政治現象は、或る政府の行った政策であり、それには反対党がある。さまざまな意見がある中の一つが政策として、或る政府によって行われている。それは絶対に正しいということがあり得ないと同時に、それが絶対に誤りであるとも言えない。恐らく両者を何時も含んでいると見なくてはならぬ。そういう認識と理解をしてゆくとすれば、これは政治の或る意見と微妙な交錯を生じる。政党の意見、立場と微妙な関連を生じる。それは現実問題として、中立法にふれる問題となりかねないのである。この辺が政治教育において、問題が生じる最も微妙な所であろう。

この問題も教師が、単に教育者という存在のみであるならば、問題を起さないですむであろうが、教師は現実には生身の人間であり、この政治的にさまざまな立場の入り乱れる社会の人間であり、個人としては、政治的意見を持ち、投票をし得る人間である。そこに問題が生じるのである。そこに教育の政治からの中立ということも強く主張され、法的規制を加えなくてはならぬという事情も起って来るのである。

しかし、根本的にはそういう法的な規則を加えて解決する問題でなく、ただそれは条件を設定したというだけなのである。やはり問題は教師の考え方が進歩することにあるのである。真に進歩的な教育を実現することにあるのである。この場合の進歩的な教育とは何か、それは前にも言ったいわゆる進歩思想の注入や押入りでなく、教育の進歩主義なのである。

教育が、人間に真に正しいものと正しくないものとを理解させることが出来ないならば、それは教育でないといわなくてはならぬ。少く

とも、そういう理想をもたない教育は、教育に値しない。しかし正しいとか正しくないとかは、何時も、相対的なものである。絶対に正しいというものはないのである。人間のなすことであるから、一つの歴史的、社会的現象は常に一面において、正しさをもち、一面において誤りをもつ、これが限界をもつ人間の真実である。こういう人間の真実の理解を与えようとするのが教育でなければならないのであって、そこに、人間たることに、自信をもち、理想をもつと同時に、謙譲に己れを反省もするのである。

一つの政治現象は、それが如何なる政策の結果のあらわれであろうと、常にそういうものをもっている。そこに人間の現象である所以がある。こういう人間の真実の姿をそこにみるという態度において、政治現象が取扱われることが、真の政治教育なのである。そこにわれわれは、政治について情熱をもち正しいものを実践しようという意欲をもつに至るのである。われわれは、今ある現在について、正しいものを見、正しくないものをみるが故により正しいものを実現しようとするのである。現在は正しいものばかりであるという如き教育はにせものである。また正しくないものばかりというのも、にせものである。そして、それは政党によらない。どの政党もそうなのであってどの政党の誤りであるかが問題でなく、大事なことは、人間の真実として、何時の時代も、いつの社会もそうなのである。それを次第によりよくする手懸として、単なる手懸きとして政党があるにすぎないのである。

だから問題は、人間社会の真実として、現在が何を課題としてもつかということを明らかにすることである。これは人間の倫理の問題といえよう。政は正なりというのは、こういうことなのである。と同時に、政治の批判は歴史の問題なのである。

砂川の問題にしても、長い人類の歴史からみれば、それは好ましくないことである。そういう問題が在ることがそもそも人間の悲劇であ

る。しかしそれは、同時に、突如として起った現象でなく、人間の長い歴史的行為の所産である。人間の理念からみて好ましくないことであつても、一朝にして、われわれの歴史の中から消え去ることの出来ない事柄である。そういう問題がなくなるには、文字通り長い努力が必要であらう。われわれはそういう努力をすべき運命に置かれているのである。こういうことだけは、われわれははっきりと言ひ得るのである。

そこで砂川問題は結論的にきわめてむずかしい問題で、分らない問題といつても、それは批判のない分らなさではない。歴史と正義の中においては堂々と批判し得る。

ただそれが、現実に政治的な処理としてどうあるべきかということになると、むずかしい問題が起るのである。理念が正しいからといって、その理念通りに行動するということが必ずしも正しいとは言えない。理念を実現するには、如何なる具体的な手順があるか、これが政治的な実践の問題であらう。それはしかし教育の今関する所でない。将来子供達が政治的に行動し得るようになった場合に、正義と歴史と運命とを自覚して、その中から具体的実践を生み出すようになってくれればよいのである。

政治現象を科学的に取扱うことは決して、逃げることでなく、真に政治を正義と歴史と運命の中において理解することであり、政治に対して、正しい態度と情熱をもたせることになるのである。こういう進歩的な教育が行われない所にむしろ問題が生ずるのである。いわゆる進歩思想を押しつけようとするのが教育であると考えたり、反対に保守的な思想を押しつけようとするのは、本当に正しい社会を実現しようとする人間をつくらないことになるであらう。